

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

○ 言語を手掛かりとしながら、文章の内容を多面的・多角的な視点から解釈したり、目的や場面等に応じて、情報を的確に理解したり、より効果的な表現に向けて検討、工夫したりする力などを求める。近代以降の文章（論理的な文章や実用的な文章、文学的な文章）、古典（古文、漢文）を題材とし、言葉による記録、要約、説明、論述、話合い等の言語活動を重視する。

問題の作成に当たっては、題材の意義や特質を生かした出題とするとともに、大問ごとに一つの題材で問題を作成するだけでなく、異なる種類や分野の文章などを組み合わせた、複数の題材による問題を含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 本文は、田中大介「【ケータイ】待ち合わせの変容」（遠藤知巳編『フラット・カルチャー——現代日本の社会学』せりか書房、2010年）より抜粋したものである。出題箇所では、都市論、モビリティ論、社会学を専門とする著者が、多様な文化事象の中から「待ち合わせ」に焦点を当て、そのダイナミックな変容を、社会契約論やハチ公像、移り変わるランドマークなど、具体的な事例を豊富に示しながら考察している。戦前から80年代にかけての価値観の変容が、ハチ公をめぐる物語や待ち合わせを成り立たせるコミュニケーションにどのような変化をもたらしたのかを正確に把握し、現代とは異なる「待ち合わせ」の姿に理解が及ぶよう、問題を設定した。

問1の漢字問題は、全体の正答率はやや高めであったが、問い合わせの正答率には学習度による違いが見られた。問2は、類似する表現を補助線として、「会うこと」の実現と「社会」の成立とが共に不確定な要素を抱えていることの理解を問うた問題であり、正答率はやや低めであった。問3は、「待ち合わせという中間的なコミュニケーション」が必要となる状況についての理解を問う問題であり、正答率はやや高めであった。問4は、ハチ公神話の変化についての理解を問う問題で、正答率は標準的なものであった。問5は、待ち合わせ場所を選び楽しんでいく能動的なコミュニケーションのありようを、「コミュニケーションの不確定性に耐える受動性」との対比において理解させる問題であるが、正答率はやや低めであった。問6は、本文の表現上と構成上の特徴の理解を問う問題であり、正答率はやや高めであった。

全体の得点率は昨年度の同テストと比べるとやや高めであったが、大問が5つに増加したことにより、解答時間を考慮し、選択肢を5つから4つへ減らしたことに起因するものと分析している。

第2問 本文は野々井透「棕櫚を燃やす」（2023年発表）による。春野（「私」）は、妹の澄香と父とともに暮らしている。父は余命一年の病に冒されており、「私」と澄香はそのことを知った上で、残された日々を「あまさず暮らす」と決めている。出題箇所は、夕暮れの庭での三人の会話の様子が描かれる場面である。「私」は「みんなの中にいるとされているふつう」になじめず、世界を「水越しに見るようなぼやけた世界」と捉えるような人物であり、これに対し澄香は「ひとつひとつの物事を肯定的に納得しながら、進みたいひと」、父は「さもありなん」というようなスタンスのひと」とあるとされる。そのような三人の人物像や関係性を本文に沿って読み取らせることを狙いとした出題であった。

問1は、小説の読解に関わる語句について、辞書的な意味を踏まえつつ文脈上の意味を理解

できるかを問うた。受験者の基礎的な語彙力を測る問題として適切であった。問2は、「みんなの中にあるとされているふつう」を「私」がどのように捉えているかを問うものであった。文脈を踏まえつつ比喩表現を理解する力を測る問題であったが、正答率はやや低めであった。問3は、澄香にとっての「話す」という行為の意味が読み取れているかを問うた。文章理解力を測る問題として適切であった。問4は、「水越しに見るようなばやけた世界」という言葉に集約される、「私」の抱える生きづらさに対する理解を問うものであった。比喩的な表現に関する読解力を測る問い合わせであるが、これまでの文脈を踏まえなければならないこともあり、正答率はやや低めであった。問5は、「私」の視点から見た父の人物像と、その父のあり方が「私」に与える影響について、的確に読み取れているかを問うた。読解力を測る問題として適切であった。問6は、生徒が作成した考察ノートを基に問題を設定した。(i)は本文中の「気になった表現」から、澄香の話の内容に対する「私」の受け止め方を読み取る力を問うものであった。(ii)は、前問を踏まえ、澄香の話を聞く「私」の描写全体から、「私」のあり方を読み取る力を問うた。

新教育課程への対応として、本年度はすべての小問において選択肢を4つに設定した。小問間での正答率にはややばらつきが見られたが、全体としての難易度は概ね妥当であった。

第3問 「本をデジタル機器で読むこと」をテーマに、高校生が自分の意見を書くという学習場面を設定した問題である。【資料I】では全国学校図書館協議会の「学校読書調査」を基に電子書籍を読んだ経験について示し、【資料II】では「生徒の学習到達度調査」を基に読書の際に用いる媒体やその回答別による「読解力」の結果を示し、【資料III】では「デジタルシフト」を進める国立国会図書館の試みを報じた新聞記事を挙げ、様々な資料からテーマについて多角的に考えていく設定とした。また、本問では、各資料の他にレポート執筆に向けて作成した生徒の【構成案】を提示し、問い合わせの対象とした。

問1では、【資料I】・【資料II】の情報からそれぞれ読み取れることや考察できることを的確に把握する力を問うた。問2(i)では、【資料III】から読み取れる国会図書館のデジタル資料に関する状況を図として再構成する力を問うた。問2(ii)では、【資料III】から読み取れる「デジタル化の取組みのこれまでの状況とこれからの見通し」を的確に理解する力を問うた。問3では、すべての資料に示された情報を的確に読み取り、それを踏まえて推論する力を問うている。

全体の得点率及び各小問の正答率はやや高めであったが、新教育課程に対応した共通テストにおける初めての大問として、概ね適切であったと考える。

第4問 素材文とした『とりかへばや物語』は、院政期に作られた（いわゆる『古とりかへばや』を改作した）と考えられる物語文学である。物語の前半では女君と男君の兄妹（姉弟）が性の役割を交換して生きる姿が描かれ、後半では二人が異性装をやめ、役割交換をもとに戻したのちの人生が語られていく。出題箇所は、権中納言によって宇治に住まわされた女君が男君の手引きによって密かに宇治から脱出した後の場面であり、女君が突如としていなくなってしまったことに驚き、悲嘆に暮れる権中納言の姿が描かれている。女性の失踪と残された者（多くは男）の悲嘆を語る物語は複数存在し、本素材文も物語文学のそうした型の一つである。古文ならではの劇的な設定が描かれていて、古文世界の理解を基とした読解力を問うに適した文章と考える。

問1は、本文の読解に必要となる基本的な単語の知識及び表現を理解する力を問うた。問2は、基本的な文法の知識及び本文の表現を根拠に、本文の内容を理解する力を問うた。問3は、乳母が権中納言に説明する女君の様子を読み取ることができるかを問うた。問4は、敬語の知識を踏まえながら、本文に描かれる権中納言の悲嘆の様子を読み取ることができるかを問うた。問5は、本文全体を視野に入れたうえで、文章の内容や展開を理解できているかを問うた。

各設問の正答率は概ね適切に分布しており、識別力の高い設問であったと言える。難易度も概ね適切であり、共通テストにふさわしい問題であったと言える。

第5問 前漢の淮南王劉安が編んだ思想書『淮南子』を題材とし、また、問6では、同じ内容の逸話について別の視点から論評を加える『呂氏春秋』の一文を提示した。いずれも漢文として標準的な文体と論理性とを備えている。

本文前半では為政者が在野の賢人を尊重した逸話が示され、後半ではそうした賢人の存在が他国からの侵略を未然に防いだことが述べられる。問6の『呂氏春秋』には、為政者に対する論評が記されている。これらの素材に示された考え方はオーソドックスな中国思想である。

各設問の出題意図と結果は次のとおりである。問1は、漢文の基礎的な語の意味を問う問題で、やや高めの正答率であった。問2は、基本的な句法とその意味を問う問題であったが、正答率はやや低めであった。問3では、文脈が適切に把握できているかを問い合わせ、問4では、本文前半の内容を問い合わせ、問5では、本文の主旨に深く関わる後半の一文の解釈を問うた。部分的な理解度を問うこれらの問題は、標準的な正答率であった。問6は、本文全体の内容を踏まえ、提示した一文の主旨を正しく理解できるかを問う問題で、概ね標準的な正答率であった。

3 自己評価及び出題に対する反響・意見等についての見解

第1問 本文は論の展開がわかりやすく、論理的な文章の内容を的確に読み取る力や思考する力を確認するうえで適切であったとの評価を受けた。問6については、文章の内容を多面的・多角的な視点から解釈する力を問うという問題作成方針に合致しており、文章の「書かれ方」の論理に注目して本文全体を捉え直す学習活動につながる良問との評価を得た。出題形式に関しては言語活動の設定を含め、そのあり方について今後も検討していきたい。なお、難易度については「本文は高等学校の授業で扱う文章レベルとして妥当」であり、設問についても「全体的に適切な難易度であった」との評価を受けた。

第2問 本問は、三人の人物像や関係性を読み取らせるとともに、随所に登場する比喩表現や表記に注目させ、表現と内容とを有機的に結びつけながら本文を理解する力を測る問題であった。素材文については、「私」の視点を通した丁寧な描写が、心情の変化の把握を中心とした文学的な文章を読み取る力を確認するうえで適切な素材であったとの評価を受けた。また、設問に関しては、全体的な難易度も適切であり、特に、問6については、(i)から(ii)へと登場人物に対する理解を深めていくという学習の過程を重視した問い合わせとなっており、授業改善の視点において大いに示唆に富むという評価を受けた。一方で、ノートを用いる必要性については疑問もあるとの指摘があった。言語活動場面の設定についてはさらに検討を重ね、今後も適切な出題となるよう努めたい。

第3問 表現や用語、図表において受験者の混乱を招くものはなく、適正であったとの評価を得た。レポートの構成を検討する場面を想定した設問は、受験者の思考力・判断力・表現力等を問うものであり、全体的な難易度としても適切であったとの評価を得た。問2(i)については、テクストの内容を構造化する力を問う出題であり、学校等における受験者の日頃の学習活動を踏まえた良問であったという評価があった。一方で、新しい大問としての作問のバリエーションの枯渇を懸念する指摘があった。今後も、実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力を幅広く問えるよう、作問における工夫を重ねていきたい。

第4問 リード文や注を参考にして古文を的確に読み取る力、また、語句や文法の知識を活用して内容を理解する力を確認するうえで適切な素材文であったとの評価を得た。加えて、表現や用語においても受験者の混乱を招くものはなく適正であり、配点についても設問の内容に見合

った配点がなされていたという評価も得られた。一方で、旧来のセンター試験に回帰した印象があり、分量や読みやすさ、新しい教育課程を意識したメッセージ性などの面で本試験との方向性の違いが見られ、本試験とのバランスの点で課題が残るという指摘もあった。この点については服膺すべき面もあるが、持続的に良質の問題を作成するためにも、様々な出題形式の可能性を担保することは重要と言えるであろう。今後も、本試験や他の大問とのバランスを視野に入れながら出題について検討し、受験者の力を適切に測ることのできる問題を作成していきたい。

第5問 本文及び問6の論評の文章レベルと文章量は妥当であり、各設問の難易度も、高等学校での学習成果を見るうえで適切であるとの評価を得た。また、同じ故事を話題としながら着眼点の異なる別の素材を提示した問6は、内容を多面的・多角的な視点から解釈する力を測ることができる良問であったとの評価も得た。今後も、高校での教育成果が適正に反映されるような作問を心がけていきたい。一方、単独の問題としてはやや物足りないと指摘も受けたため、今後の課題としたい。

4 ま　と　め

第1問 本問では、具体例を参考に論理的な文章を丁寧に読解する能力を問うことを基本としたが、素材文、出題内容、難易度は適切であり、筆者の表現の意図を読み取ることを求める設問などは、授業改善の視点からも大いに示唆に富むものとなった。今後も生徒の学習過程を意識した良問の作成に努めたい。

第2問 基本的な読解力を判定するうえで、適切な出題であったと言える。とりわけ問6については、生徒が本文中の表現について気づいたことを基に、登場人物の心情やあり方について考察を深めていくという学習過程を意識した問い合わせることができた。今後も言語活動の場面を想定した問い合わせを積極的に試み、更なる改善に努めたい。また、難易度に関しても適切なレベルになるよう慎重に作問を進めたい。

第3問 複数の機関による調査と新聞記事を用い、文章を書くための構成案を作るという設問にした。実用的な文章を素材とした共通テスト最初の大問として適切なものであったと考える。今後も、様々なバリエーションを取り入れた良問を提供できるよう工夫していきたい。

第4問 古文単語や文法事項といった基礎的な知識を問う設問、文脈を踏まえて内容を問う設問、敬語の知識を踏まえて本文の内容を問う設問、本文全体の内容理解を問う設問など、古文の学習成果を適切に評価できる出題となった。今後も多様な素材を吟味し、各問の設定やリード文、出題方法などを工夫することによって、受験者の学力を適切に測る作問を心がけたい。

第5問 本問は素材文、問い合わせの形式、難易度ともに、高等学校で習得した基礎的語法や読解力、思考力を適正に評価できるものであったと言える。今後も引き続き、素材文の選択、問題の検討を入念に行い、他の大問とのバランスに配慮しながら、共通テストとしての適切な問題作成に努めるとともに、新しい学習指導要領に沿うような問題となるよう工夫を重ねたい。